

---

# 大人のための異文童話集3 眠り姫

天野久遠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大人のための異文童話集3 眠り姫

### 【Nコード】

N9411L

### 【作者名】

天野久遠

### 【あらすじ】

誰にでもきつと、自分だけのものにしておきたいものがあるはず  
です。況してやそれが、お気に入りであればあるほどに、手に入ら  
ないのなら眠り姫のように、いつまでも眠っていさせたくなっ  
てしまっ…。

それはもう遠いむかし。

ボクは何でもお気に入りを見つけては宝物にしていた。

そんな宝物の中でも一番のお気に入りには、この小さなガラスのカケラ。

どこもかしこもが、いまのようにアスファルトやコンクリートではなかった頃、そのガラスは土の中に深々と埋まっていたんだ。

深い緑色がとても綺麗で…。

いま思えば、あれはJ&Bのウイスキーボトルだったのかもしれない。

しかしそんなことはどうでもいい。  
具体的にハッキリとはしないから、思い出として美しいままなんだ。

そのガラスのカケラは道路の端に落ちていた。

いつからなのか…きつと沢山の車に曳かれ、雨に濡れては転がって、数え切れないほど地面で擦れてしまったんだろう。

ボクが見つけた時にはもう角の鋭角さもなくなって、まるで宝石の原石のよう見えただ。

そう、エメラルドよりも深くメノウよりも霞んでいる宝石のカケラ。

ボクはそれを拾って持ち帰り、きれいに洗い流した後でタオルで磨いた。

何度も何度も、いつでもどこでも…本物の宝石になるんだと。

そうしてるうちに、もっと沢山それが欲しくなってくる。

ボクは矢も盾もいらなくなつて、今度はそれと同じものを捜して歩いた。

そのうちに、道路から少し入った空き地に埋まっている、カケたガラスビンらしきものを見つけたんだ。

近寄ってみるとそれは、間違いなくあの宝物と同じ色の鈍い光を放っていた。

ボクはとても嬉しくなっていた。

それこそもう、ドキドキしながら夢中で掘った。

それが危険なガラスであることも忘れて…。

とにかく夢中になつて、両手で土を掘り起こしたんだ。

幾度となく雨で固められた土。

それはとてもとても固く、爪の中には砂が入り込んで痛い。

それでもボクは諦めないんだ。

このドキドキが止まるまで、決してボクには諦めることなんて出来ない。

掘り起こすたびに指先に、チクリとした痛みが走るけど、そんなのは平気さ。

頭の中も心の中も、そうして掘り起こして出てきた、大きな宝石の原石のことでいっぱいなんだ。

気がつくほどの指からも血が流れ出していた。

それでも夢中で掘る。

痛みはあるけど、その痛みがそのうちに喜びを運んで来てくれるんだ。

とにかく余計なことを考えちゃいけない。

ただ掘ることだけを、あの宝物のことだけを…いまは考えるんだ。

ほどよい程度まで掘起こしはしたのに、一向に抜け出る気配がしない。  
それでも力一杯に、掘った穴に手をいてたとき、ブスツという音が掘っている手から脳に聞こえた。  
さすがにこれは痛い。  
涙が出て来る。

唇を噛み締めながら、鼻水を啜りながら。ボクは…。

ポケットの中でクシャクシャになっていたハンカチを取り出して、トクトクと血が流れ出すその手に巻いたんだ。  
どれくらいの間掘ったのだろう。

もう日が西に傾いて、雲もボクと同じように血まみれになっていた。

でも、明日はないんだ。

ボクだけの大切な宝物。

他の誰かに絶対に渡さないし、知られたくもないから。

そんな念いが走るとき、ボクがちよっぴり諦めかけているかも知れないと気付く。

どうして取れないの？

こんなに一生懸命になって掘り起こしたし、もうこんなに見えていくのに。

傷ついた手や指の痛みなのか、それとも悔しさなのか…。

涙が出て来て止まらない。

だけど、涙。

拭くためのハンカチは、もう使っちゃったよ。

ボクだけの大切な宝物、きっとキミは眠り姫なんだね。  
ボクだけが知っているお気に入り。  
だけどキミはいつまでも眠り続けるだけ。

どうせ掘り出すことが出来ないのなら、いつそ、もっと深くに埋めてしまおう。

そう。誰の目にも見つからないように、もっともっと深く深く埋めてしまおうんだ。

ごめんね眠り姫、キミが待つ王子さまはボクじゃない。

でもボクは、キミが待っている王子さまには絶対会わせない。  
こうしていつまで眠たままでも、キミはもう、このボクだけのものなんだ。

ボクは今度は土を埋め直す。

それから周りを、できる限りの力を込めて足で踏む。  
掘り起こす前よりも、少し盛り上がってしまったって不自然に見えぬよう。

そして土の表面を手で叩いて、手で撫でて…乾いた土もかけないといけない。

こうして絶対に眠り姫は誰にも渡さない。

ボクは絶対に後ろは振り向かない。

そうさ、決してその場所を自分で教えるようなことはしないんだ。

今までの時間。

何もなかったように袖で涙と鼻水を拭いて、血だらけになった手は

しっかりと、誰が見ても分からないようにポケットの中に隠す。  
血まみれになった空を見上げて、口笛を吹きながら歩くんだ。  
そうしないと、涙から溢れてしまうから。

とつても残念だけどこれでいいんだ。

少なくともボクだけが、眠り姫のことを知ってるんだから。

血まみれの手を入れたポケットの中には、握ってほんの少しだけ温かくなった、ボクの一歩のお気に入り、眠り姫が残したカケラがある。

ほんの小さなカケラだけど、大切なボクだけの宝物。

それは刹那だけど、眠り姫がボクだけに残してくれた夢への扉だったから。

(後書き)

BGMにはピーター・グリーンのアльバム“虚空のギター”を聴いて欲しいですね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n94111/>

---

大人のための異文童話集3 眠り姫

2010年10月15日01時38分発行